

・	研	究	主	題															
生	徒	の	「	自	ら	学	ぶ	意	欲	」	を	引	き	出	す	情	報	教	
育	の	あ	り	方	を	求	め	て											
-	マ	ル	チ	メ	デ	ィ	ア	教	育	の	環	境	活	用	の	工	夫	-	
・	主	題	設	定	の	理	由												
来	る	べ	き	2	1	世	紀	は	、	高	度	情	報	通	信	社	会		
と	い	わ	れ	る	。	こ	の	よ	う	な	社	会	に	お	い	て	、		
(1)	情	報	を	主	体	的	に	収	集	・	判	断	・	処	理	し	、		
発	信	・	伝	達	で	き	る	情	報	活	用	の	実	践	力	、	(2)		
情	報	手	段	の	特	性	理	解	や	自	ら	の	情	報	活	用	を	評	
価	・	改	善	で	き	る	情	報	の	科	学	的	な	理	解	力	、		
(3)	情	報	モ	ラ	ル	・	情	報	に	対	す	る	責	任	に	つ	い		
て	考	え	、	望	ま	し	い	情	報	社	会	の	創	造	に	参	画	し	
よ	う	と	す	る	態	度	を	身	に	つ	け	て	い	く	こ	と	が	大	
切	と	な	る	で	あ	ろ	う	。	従	っ	て	、	今	後	の	学	校	教	
育	で	は	、	こ	の	よ	う	な	観	点	を	踏	ま	え	た	情	報	教	
育	の	充	実	と	情	報	活	用	能	力	の	育	成	が	重	要	で	あ	
る	と	考	え	る	。														

そこで、これを支えるものとして以下の
3点を柱とした。

ア、多様なメディア環境の整備と活用

イ、ネット社会への参画する態度の育成

ウ、教職員の指導技術の向上

この3つの柱に基づき、下記のような研
究仮説を立てた。

(1) 授業で様々なメディアを活用し、多様
な学習活動を展開すれば、メディアの特
性を理解し、より効果的に情報を収集し
たり、相手に伝えようとする意欲が高ま
るのではないか。

(2) 日常生活のモラルの向上を図りつつ、
インターネット上の諸問題について自ら
考える場を設ければ、ネットワークでの
コミュニケーションのあり方や問題点、

情報の信頼性、信憑性、善悪などを正しく判断できる力を養うことができるのではないか。

(3) 職員のコンピュータリテラシーや情報リテラシーが高まれば、情報教育への実践の意欲が高まり、授業実践の広がりが生まれるのではないか。

・ 研究内容

昨年度の実践の反省から下記のような研究の柱を考えた。

(1) 生徒の興味・関心に応える指導の実践
インターネットの効果的な活用となる
と、まだまだ研究の緒についたばかりで、
これから実践研究を深めなければなら
ない。

ア、総合的な学習における情報教育の
実践研究へ向けて、課題解決的な学
習を導入しつつ、生徒が教室の枠に

			し	か	し	、	本	校	の	学	級	数	は	、	本	年	度	2	1			
			学	級	で	あ	る	。	こ	れ	に	対	し	て	コ	ン	ピ	ュ	ー	タ		
			一	室	は	、	1	つ	で	あ	り	、	ま	た	、	ク	ラ	イ	ア	ン		
			ト	マ	シ	ン	の	台	数	も	不	足	し	て	い	る	。					
			こ	の	た	め	、	他	教	科	で	コ	ン	ピ	ュ	ー	タ	を	活			
			用	し	た	学	習	の	展	開	を	計	画	し	て	も	、	実	際	に		
			は	、	時	間	割	上	、	か	な	り	の	無	理	が	生	じ	る	。		
			昨	年	度	も	、	あ	る	一	定	の	時	期	ご	と	に	優	先			
			教	科	を	決	め	、	調	整	を	図	っ	て	き	た	。					
			以	前	か	ら	、	国	語	、	社	会	、	理	科	、	保	健	体			
			育	等	で	、	コ	ン	ピ	ュ	ー	タ	を	活	用	し	た	学	習	を		
			展	開	し	て	き	た	が	、	今	後	さ	ら	に	他	教	科	で	も		
			実	践	を	図	る	た	め	に	は	、	各	学	年	教	科	等	の	年		
			間	指	導	計	画	段	階	で	の	調	整	が	必	要	で	あ	る	。		
			こ	れ	は	、	す	で	に	予	想	さ	れ	た	課	題	と	し	て			
			取	り	組	ん	で	き	て	い	る	が	、	こ	の	調	整	を	確	立		
			し	た	い	と	考	え	る	。												
			(3)	活	用	の	モ	ラ	ル	の	向	上	の	た	め	の	プ	ロ	グ	ラ
			ム	作	成																	

(4) 職員研修の計画的実施

職員のマルチメディアに関する意識には、かなり高いものがあり、日常的な業務処理の中で自然な相互援助の形で、パソコンやソフトに関する研修が行われている。

職員の85%が私物のパソコンを所有している。また、何らかの形で、インターネットを活用している者は、72%である。

こうしたことを背景に、昨年度、ネットワークを授業に活用した教科は、国語、社会、理科、英語、技術・家庭科、保健体育科、学級活動、その他(生徒会、部活動など)をあげることができる。

本年度は、さらに授業での効果的な指導を図るために、授業での活用を目的とした研修を計画的に実施したいと考える。

「インターネットを生かした交流学習」

足利市立西中学校・長浜市立北中学校

1. 単元名

世界から見た日本 「身近な地域を調べよう」

2. 事前打ち合わせ（担当者会議）

第1回 交流学習打ち合わせ

日時：平成11年8月7日（土）

於：足利市立西中学校および群馬県前橋市（宿舎）

担当者：小川裕之（足利西中）、廣部豪男（長浜北中）

第2回 交流学習打ち合わせ

日時：平成11年8月22日（日）

於：長浜市立北中学校校長室

担当者：小川裕之、須藤秀幸（足利西中）
片山 勝（教頭）、廣部豪男、

6	.	研	究	仮	説																			
		(1)	交	流	方	法	を	工	夫	す	る	こ	と	に	よ	り	、	学	習					
			の	対	象	で	あ	る	相	手	校	の	地	域	の	学	習	が	で	き				
			る	だ	け	で	な	く	、	地	元	に	つ	い	て	の	学	習	も	深				
			め	る	こ	と	が	出	来	る	の	で	は	な	い	か	。	[社]				
		(2)	交	流	し	合	う	こ	と	に	よ	り	、	生	徒	の	意	欲	が					
			た	か	ま	る	の	で	は	な	い	か	。	[社	・	情]						
		(3)	ネ	ッ	ト	社	会	の	基	本	で	あ	る	「	G	i	v	e	&	T	a	k	e	」
			の	精	神	を	学	ば	せ	る	こ	と	が	出	来	る	の	で	は	な				
			い	か	。	(相	手	の	立	場	の	尊	重	、	ネ	チ	ケ	ッ	ト				
			の	涵	養)	[情]															
		(4)	様	々	な	交	流	手	段	を	活	用	す	る	こ	と	に	よ	り	、				
			メ	デ	ィ	ア	の	特	性	を	理	解	し	、	よ	り	効	果	的	に				
			相	手	に	伝	え	よ	う	と	す	る	意	欲	が	高	ま	る	の	で				
			は	な	い	か	。	[情]														
		(5)	生	徒	の	視	野	を	広	げ	、	共	に	学	び	合	う	仲	間					
			と	し	て	の	連	帯	感	(友	情)	も	養	う	こ	と	が	出				
			来	る	の	で	は	な	い	か	。	[社	・	情]								
7	.	展	開	の	概	要																		

(1) 相互の学級で同じ課題を設定する。

(要調整)

(2) 主として同じ課題のグループで交流を
していく。

(3) 西中の生徒は栃木県について調べる。

北中の生徒は滋賀県について調べる。

(4) 受けた質問になどについて地元の情報
を集めて、伝え合う。

(5) 成果を学級内だけでなく、相手校とも
交流し合う。

8 . 留意点

A、利用する通信メディアの特性

(1) メール

相互の連絡の確認。

意見交換や質問など

<メールの活用場面>

校時の調整が出来なくても可能であ
る。

ジックリと調べたり考えたりして交

流でできる。

(2) TV会議

タイピングなどが苦手な生徒も容易に参加できる。

リアルタイムで映像（動画）・音声・文字を送ることができる。

親近感が湧く。

< TV会議の活用場面 >

ビジュアルな情報交換（動きを伝える）

即時性... 自己紹介や相談など

Web化ができない内容の場合、それを補うことができる。

(3) Web

大量のデータを相手に送ることができる。

多くの仲間に公開できる。（相手グループ以外も閲覧可）

< Webの活用場面 >

成果のまとめを伝える。

B、時間割調整など定期的な連絡。

C、交流メールの形式

題名を「交流： 年 組 班」とする。

D、メール交流の日程

基本的に、火・金曜日を送受信日として
位置づける。

9 . 情報教育としての今後の発展

今回の指導の経験を生かして、他教科・
領域でも、TV会議システムを生かした学
習が展開できないか。

< 関連 Web Page >

社会科交流学習（足利西中 - 長浜北中）

URL = <http://www.biwa.ne.jp/~kita-jhs/kouryu/index.htm>

第2回滋賀県情報通信ネットワーク活用

連絡協議会(99/10/08)

URL = <http://www.biwa.ne.jp/~kita-jhs/kouryu/kyougikai.htm>

10. 考察

(1) 生徒には、初めてのインターネットを活用した交流であった。そのため、通信メディアの特性については、体験を通してつかませたいと考えて指導計画を立案し、機器の準備も行った。

生徒は、相手校の生徒との交流が深まるにつれ親近感を持ち、その相手校の生徒への質問に対する返信という情報発信の目的が明確であったため、意欲的に取り組むことができた。

また、グループによっては、課題に合ったメディアを選択し、成果をあげることができた。とりわけ、テレビ会議システムの特性を生かすことができた。

しかし、ややもすると相手の表情も声も聞こえるテレビ会議システムが、生徒の

興味・関心の的となってしまうがちであった。

そのため、他のメディアでの情報発信の方が効果的であると考えられるものまで、テレビ会議を用いて交流しようとする傾向になりがちで、失敗をしたグループもあった。

しかし、こうした失敗に学んだグループは、Webでの発信に切り替えたり、メールによる交流に切り替えることができた。

(2) 今回、テレビ会議システムには、Microsoft NetMeetingを用いた。これは、インターネット回線を使って接続でき、入手も容易で、しかも無料で使用できるソフトである。

このソフトで一定の成果をあげることができると、予算にゆとりのない学校現場にとっては、大きな福音となるためである。

1	.	単	元	名																
		古	典	「	お	く	の	ほ	そ	道	」	を	探	訪	し	よ	う			
2	.	単	元	設	定	に	よ	せ	て											
		情	報	の	基	本	は	、	言	語	で	す	。	そ	の	た	め	、	常	
		々	、	一	般	的	に	パ	ソ	コ	ン	や	イ	ン	タ	ー	ネ	ッ	ト	の
		活	用	か	ら	距	離	の	あ	る	国	語	科	で	、	イ	ン	タ	ー	ネ
		ッ	ト	を	活	用	し	た	学	習	の	展	開	が	で	き	な	い	か	と
		考	え	て	い	る	。													
		こ	の	学	習	計	画	は	、	昨	年	、	秋	田	県	天	王	町	立	
		天	王	中	学	校	の	水	品	先	生	か	ら	「	象	潟	(き	さ	か
		た)	」	の	風	景	写	真	を	送	っ	て	い	た	だ	い	た	こ	と
		を	思	い	出	し	、	芭	蕉	の	「	お	く	の	ほ	そ	道	」	を	題
		材	に	、	イ	ン	タ	ー	ネ	ッ	ト	を	活	用	し	た	幅	の	広	い
		学	習	活	動	が	で	き	な	い	か	と	思	い	つ	い	た	こ	と	が
		発	端	で	あ	る	。													
		「	奥	の	細	道	」	は	、	周	知	の	よ	う	に	、	俳	諧	紀	
		行	文	で	あ	る	。	そ	の	た	め	、	「	お	く	の	ほ	そ	道	」
		の	ル	ー	ト	に	当	た	る	学	校	や	芭	蕉	と	ゆ	か	り	の	あ

る	地	域	の	学	校	な	ど	と	下	記	の	よ	う	な	内	容	で	交	
流	す	る	こ	と	に	よ	り	、	古	典	の	学	習	だ	け	で	な	く	、
生	徒	の	コ	ミ	ュ	ニ	ケ	ー	シ	ョ	ン	能	力	を	伸	ば	す	学	
習	を	併	せ	て	実	践	で	き	る	の	で	は	な	い	か	と	考	え	、
今	回	、	イ	ン	タ	ー	ネ	ッ	ト	を	活	用	し	た	学	習	を	計	
画	し	た	。																
(1)	芭	蕉	縁	の	地	や	施	設	(社	寺	な	ど)	の	情	報
(2)	芭	蕉	関	連	の	記	念	館	な	ど	の	情	報				
(3)	芭	蕉	句	碑	の	情	報										
(4)	芭	蕉	像	の	情	報											
(5)	芭	蕉	に	関	す	る	伝	承	の	情	報						
ま	た	、	「	お	く	の	ほ	そ	道	」	の	ル	ー	ト	に	当	た		
る	学	校	や	ゆ	か	り	の	地	の	学	校	が	こ	れ	ら	の	情	報	
を	W	e	b	で	発	信	し	、	そ	れ	ら	を	リ	ン	ク	で	結	ぶ	
こ	と	が	で	き	れ	ば	、	新	し	い	情	報	源	と	し	て	、	今	
後	も	全	国	各	地	で	活	用	し	て	い	た	だ	け	る	の	で	は	
な	い	か	と	も	考	え	て	い	る	。									
幸	い	に	し	て	、	滋	賀	県	は	、	芭	蕉	と	は	縁	の	あ		

る土地柄で、「おくのほそ道」と並び称される「幻住庵の記」は、石山（大津）の幻住庵に滞在した折りに書かれたものである。また、芭蕉の眠る墓も義仲寺（大津市）にある。長浜からは、少し遠いが、これらもまた、子どもたちの古典や郷土への目を開かせる題材になりそうである。

さらに、想像をたくましくすると、この「おくのほそ道」の道中、敦賀と大垣の間には、長浜がある。芭蕉が、わが町にその足を踏み入れた可能性は十分にある。また、芭蕉の句碑もあり、良疇寺には、芭蕉像も残されている。そうした地元の古人の芭蕉への思いに触れ、また、それに他の地域の人々の芭蕉への思いを重ね合わせることも豊かな体験となると考えた。

3 . 単元のねらい

- (1) 古典に興味を持ち、古人の思いを偲ぶ。
- (2) 芭蕉が体験した人や自然とのふれあい

を、インターネットを活用して追体験する。

(3) 自分たちの得た情報を発信することにより、学びの輪を広げる。

4 . 情報教育に関わる具体的な活動

(1) 芭蕉の歩いた奥の細道をWebを使って探訪しよう。

Web Page 閲覧

メールによる情報収集

(2) 学習したことをWeb化しよう。

5 . 情報教育としての評価の観点

(1) 新しい情報を意欲的に創造することができたか。

(2) 必要な情報を取捨選択し、活用できたか。

(3) ネットワークを守って、ネットワークを活用しようとしたか。

(4) 情報の真偽を正しく判断しようという

態度が身に付いたか。

6 . 指導の展開

1 . 芭蕉や「おくのほそ道」について概要を知る。

(1) 事前調査（芭蕉についてのイメージや今回の学習に期待すること）

(2) 音読練習をする。

(3) 冒頭部分の概要を把握する。

(4) 芭蕉の芸術観、人生観について知る。

(5) 図書資料やWeb閲覧により、課題意識を持つ。

他教科のコンピュータ室使用との重複の調整のため、指導の順序は、随時、変更する。

2 . 発展学習

(1) 学習のねらいや方法を知る。

(2) 学習計画を立てる。

3	.	情	報	交	換																
		ア	、	芭	蕉	の	生	ま	れ	故	郷	の	近	く	の	学	校	と			
				(松	阪	中	部	中)											
		イ	、	芭	蕉	の	終	焉	の	地	の	学	校	と	(石	山	中)		
		ウ	、	芭	蕉	の	ゆ	か	り	の	地	の	学	校	と	(信	楽	中)	
		エ	、	「	お	く	の	ほ	そ	道	」	ル	ー	ト	の	学	校	と			
				(長	浜	北	中)												
				チ	ェ	ツ	ク	5		E	-	M	a	i	l	(同	世	代	の	
				友	だ	ち	へ	の	メ	ー	ル)									
				交	流	の	メ	ー	ル	の	チ	ェ	ツ	ク	(ネ	チ	ケ	ツ	ト)
		4	.	学	習	の	ま	と	め	と	学	級	内	交	流						
		7	.	共	同	企	画	「	芭	蕉	ネ	ツ	ト	」							
		<	参	加	校	>															
		三	重	県	松	阪	市	立	中	部	中	学	校								
		滋	賀	県	甲	賀	郡	信	楽	町	立	信	楽	中	学	校					
		滋	賀	県	大	津	市	立	石	山	中	学	校								

岩手県盛岡白百合学園中学高等学校 小

野寺俊博先生

< 関連 Web Page >

共同企画「芭蕉ネット」

URL = <http://www.biwa.ne.jp/~kita-jhs/basyou/index.htm>

8 . 考察

(1) 当初の願いは、「おくのほそ道」のルート
の学校との交流を図れないかという
ものであった。ダイレクトメールや知人
を介しての呼びかけなどを行ったが、東
北地方の該当する各校のインターネット
接続環境は、まだ十分整備されていない
ところが多く、結局、学級単位での参加
校は、三重県1校、滋賀県3校となった。

しかし、今回の取り組みにおいて、ネ
ットワークのつながりの中で、多くの方
が支援を申し出てくださり、現在、取り
組みを進めているところである。そうし

たボランティアのみなさんの支え自体が
生徒にとってネットワークの本質を学ぶ
素晴らしい体験の場となっている。

(2) この学年の生徒は、1年生以来、課題
解決学習の体験も乏しく、また、コンピ
ュータの基本的な操作の訓練も十分には
受けてこなかった。

そのため、国語科の内容以前の部分の
指導にかなりの時間を要した。

しかし、多くの生徒は、興味を持って
意欲的に取り組んでいる。

現在は、ボランティアの方などとのメ
ール交換の段階であるが、他校生との情
報交換の場面になれば、さらに成果をあ
げることができると期待し
ている。

< 事例 3 >

「パソコン部のWeb作成の取り組み」

1	.	取	り	組	み	の	概	要													
		本	校	は	、	数	年	前	よ	り	ボ	ラ	ン	テ	ィ	ア	活	動	の		
		実	践	に	力	を	入	れ	て	き	て	い	る	。							
		そ	こ	で	、	パ	ソ	コ	ン	部	で	は	、	本	年	度	「	コ	ン		
		ピ	ユ	ー	タ	を	人	の	た	め	に	役	立	て	よ	う	」	を	ス	ロ	
		ー	ガ	ン	に	掲	げ	て	、	活	動	を	ス	タ	ー	ト	し	た	。		
		生	徒	た	ち	は	、	さ	ま	ざ	ま	な	ア	イ	デ	ア	を	出	し		
		合	い	、	活	動	に	取	り	組	も	う	と	し	た	が	、	成	果	が	
		見	え	ず	挫	折	を	繰	り	返	し	た	。								
		そ	の	た	め	、	環	境	問	題	の	取	り	組	み	の	交	流	を		
		し	て	い	た	職	員	が	発	案	し	、	「	長	浜	市	立	教	育	研	
		究	所	の	研	究	紀	要	第	1	7	集		環	境	学	習	ガ	イ		
		ブ	ッ	ク	『	身	近	な	自	然	と	わ	た	し	た	ち	』	」	の	W	
		e	b	化	を	部	員	た	ち	に	提	案	し	た	。						
		教	育	研	究	所	の	ご	厚	意	も	あ	り	、	5	ヶ	月	間	に		
		渡	っ	て	部	員	が	力	を	合	わ	せ	て	取	り	組	み	、	完		
		成	し	、	ネ	ッ	ト	上	で	公	開	す	る	こ	と	が	で	き	た	。	
2	.	生	徒	作	文																
		「	こ	の	ホ	ー	ム	ペ	ー	ジ	は	僕	た	ち	北	中	学	校	パ		
		ソ																			

コ	ン	部	が	ボ	ラ	ン	テ	ィ	ア	活	動	の	一	環	と	し	て	作	
成	し	た	も	の	で	す	。												
		こ	の	ホ	ー	ム	ペ	ー	ジ	の	元	と	な	っ	た	「	身	近	な
自	然	と	わ	た	し	た	ち	」	と	い	う	本	は	、	タ	イ	ト	ル	
ど	お	り	身	近	な	自	然	の	こ	と	が	(お	も	に	滋	賀	県	
長	浜	市	の	こ	と	で	す	が)	幅	広	く	、	く	わ	し	く	書	
い	て	あ	る	素	晴	ら	し	い	本	で	す	。							
		今	年	の	パ	ソ	コ	ン	部	の	方	針	は	「	コ	ン	ピ	ユ	ー
タ	を	人	の	た	め	に	役	立	て	よ	う	」	と	い	う	も	の	で	
す	。	そ	こ	で	、	い	ろ	い	ろ	な	こ	と	を	し	て	き	ま	し	
た	が	、	す	べ	て	中	途	半	端	に	終	わ	っ	て	し	ま	い	、	
こ	れ	か	ら	何	を	す	れ	ば	い	い	の	か	考	え	て	い	た	と	
き	、	先	生	が	一	つ	の	話	を	も	っ	て	き	て	く	だ	さ	い	
ま	し	た	。	先	生	の	話	を	う	か	が	っ	た	と	こ	ろ	、	僕	
た	ち	の	町	で	は	先	生	方	が	小	・	中	学	生	の	た	め	に	
素	晴	ら	し	い	ガ	イ	ド	ブ	ッ	ク	を	作	っ	て	下	さ	っ	て	
い	る	そ	う	で	、	そ	の	素	晴	ら	し	い	本	を	僕	た	ち	だ	
け	で	活	用	す	る	の	は	も	っ	た	い	な	い	、	も	っ	と	多	
く	の	人	に	見	て	使	っ	て	も	ら	っ	た	ら	ど	う	か	と	言	
う	も	の	で	し	た	。													

3 . 考 察

この Web 作成を通して、部員たちは、
コンピュータリテラシーが高まるだけでなく、
各方面から寄せられた励ましや感謝の
メールにより、自分たちの取り組んだ情報
発信の意義が理解でき、インターネットの
「Give&Take」の精神を体験できたことは、
大きな成果であった。

B 各教科等の年間指導計画の調整

21 学級に対して、コンピュータ室が 1
つの環境のため、コンピュータ室利用の調
整は、一昨年来の課題であり、各教科の全
体計画や年間指導計画の見直しを提起して
きた。

しかし、昨年度までは、校内研究で取り
組んできていたが、本年度の研究の主題も
領域も変わったため、継続研究が困難とな
った。

そのため、毎月、コンピュータ室利用

調	整	会	議	を	開	き	、	随	時	調	整	を	行	う	こ	と	と	な
っ	た	。																
	ま	た	、	そ	の	結	果	を	ホ	ワ	イ	ト	ポ	ー	ト	に	記	載
し	て	、	職	員	室	前	廊	下	に	掲	示	し	、	生	徒	へ	の	便
宜	も	図	る	よ	う	に	し	た	。									
	し	か	し	、	時	間	割	の	調	整	が	う	ま	く	い	か	ず	、
研	究	の	推	進	は	も	と	よ	り	、	通	常	の	授	業	で	の	広
が	り	を	生	み	出	す	こ	と	も	困	難	で	あ	っ	た	。		
	来	年	度	以	降	、	新	教	育	課	程	へ	の	移	行	が	ス	タ
ー	ト	す	る	中	で	、	再	度	、	調	整	を	図	り	た	い	と	考
え	る	。																
C		活	用	の	モ	ラ	ル	の	向	上	の	た	め	の	プ	ロ	グ	ラ
作	成																	
	イ	ン	タ	ー	ネ	ッ	ト	の	活	用	が	叫	ば	れ	て	い	る	反
面	、	そ	こ	に	は	影	の	部	分	も	あ	る	。	そ	う	し	た	ネ
ッ	ト	社	会	に	、	子	ど	も	た	ち	が	無	防	備	に	参	加	し
ト	ラ	ブ	ル	に	卷	き	込	ま	れ	る	事	例	も	報	告	さ	れ	は
じ	め	て	い	る	。													
	例	え	ば	、	本	年	度	新	聞	紙	上	を	に	ぎ	わ	せ	た	だ

また、8月には、情報倫理に関する職員
研修を実施した。

< 関連 Web Page >

マルチメディア職員研修 (第4回)

URL = <http://www.biwa.ne.jp/~kita-jhs/kenkyu/kensyu/99kensyu04.htm>

なお、実際の実践は、2学期末に2・3
年生の道徳の時間に一斉に行う予定であっ
たが、学校行事の都合で1月に延期になっ
ている。

< 関連 Web Page >

道徳学習指導案「個人情報大切さについ
て考えよう」(Ver.1.0)

URL = http://www.biwa.ne.jp/~kita-jhs/kenkyu/rinri/rinri_an01.htm

1月中旬に予定している実践は、「個人
情報の保護」に関するものである。さらに、

性	や	暴	力	、	差	別	な	ど	の	情	報	へ	の	対	応	な	ど	、		
幅	広	く	取	り	組	み	必	要	が	あ	る	。								
D		職	員	研	修	の	計	画	的	実	施									
		本	校	職	員	の	マ	ル	チ	メ	デ	ィ	ア	に	関	す	る	意	識	
		に	は	、	か	な	り	高	い	も	の	が	あ	り	、	日	常	的	な	業
		務	処	理	の	中	で	自	然	な	相	互	援	助	の	形	で	、	パ	ソ
		コ	ン	ヤ	ソ	フ	ト	に	関	す	る	研	修	が	行	わ	れ	て	い	る
		ま	た	、	昨	年	度	、	校	内	ネ	ッ	ト	ワ	ー	ク	が	敷	か	
		れ	、	現	在	、	半	数	近	い	職	員	が	そ	れ	を	日	常	業	務
		に	活	用	し	て	い	る	。											
		し	か	し	、	そ	れ	が	コ	ン	ピ	ュ	ー	タ	等	を	活	用	し	
		た	授	業	実	践	に	結	び	つ	く	段	階	に	は	、	至	っ	て	い
		な	い	。																
		そ	の	た	め	、	職	員	の	コ	ン	ピ	ュ	ー	タ	リ	テ	ラ	シ	
		ー	や	情	報	リ	テ	ラ	シ	ー	を	さ	ら	に	高	め	る	必	要	性
		が	あ	る	と	考	え	、	「	素	晴	ら	し	い	環	境	を	み	ん	な
		(先	生	・	生	徒)	の	も	の	に	」	を	ス	ロ	ー	ガ	ン	に
		下	記	の	よ	う	な	職	員	研	修	を	計	画	、	実	施	し	て	き
		た	。																	

< 関 連 W e b P a g e >

平 成 1 1 年 度 職 員 研 修

URL = <http://www.biwa.ne.jp/~kita-jhs/kenkyu/kensyu/99kensyu.htm>

な お 、 機 器 の 数 の 関 係 で 、 職 員 全 員 対 象
の 実 技 研 修 は 、 設 け ら れ な い た め 、 講 座 の
申 し 込 み 制 に し て 実 施 し て き た 。

(1) コ ン ピ ュ ー タ ー 室 活 用 に つ い て

コ ン ピ ュ ー タ ー 室 利 用 の マ ナ ー や 方 法 、
イ ン タ ー ネ ッ ト 利 用 の 校 内 規 約 の 周 知
徹 底

(2) ネ ッ ト ワ ー ク 活 用 に つ い て

機 器 の 共 有 に つ い て 理 解 し 、 そ の 機 能
を 活 用 し て 、 日 常 業 務 を 効 率 的 に 行 う 。

(3) イ ン タ ー ネ ッ ト 活 用 に つ い て

ウ ェ ブ ペ ー ジ 閲 覧 や ペ ー ジ か ら の 教 材
作 成 の 方 法 、 メ ー ル 交 換 の 方 法 を 身 に

つける。

著作権について、理解を深める。

(4) プレゼンテーション作成について

普段の授業でも使えるプレゼンテーションの作成

(5) 授業実践の事例研究

授業でどんなことが可能か、先進校の実践に学ぶ。

(6) ホームページ作成講座

ホームページ作成自主研修講座（時間外に実施）

申し込み制にせざるを得ない環境であるため、致し方ない面もあるが、全員参加でないため、職員の意識が低く、抜本的な改善を要するよう思う。

このため、1月下旬には、外部講師を招いての全員参加の講習会を開く計画を進めている。

・ 反省と考察

(1) コンピュータリテラシーと情報リテラシーについて

生徒の実態を見ると、コンピュータを活用した学習活動を十分に体験していない段階の生徒の意識は、コンピュータはゲーム機の延長線上に近いところにあるように思われる。しかし、授業での活用を通して、徐々にその意識の変容が見られるようになってくるように感じられる。

とりわけ、3年生は、今までコンピュータを活用した学習活動を体験しておらず、そのため、学習の当初は物珍しさから、マウスをいじくったり、OSの設定を変えてみたりする生徒が数多くいた。

しかし、徐々に機器の操作に慣れ、目的を持ってWebを探索したり、メールで交流をするようになってくると、機器の取り扱いも丁寧なものになり、無駄な時間を過

ごさなくなってきた。そして、その次の段階では、時間を惜しんで取り組む姿が見られるようになってきている。

コンピュータリテラシーの伸長に伴って、情報リテラシーも身に付いていっているのであらうか。

(2) メディアの効果的な活用について

インターネットを初めて体験する生徒には、Webにはあらゆる情報があるような錯覚に陥りがちである。しかし、課題を解決しようとして取り組んでいく内に、インターネットの限界にも気づき始めるようである。そして、次に、従来彼らが用いてきた調べ学習の原点ともいえる書籍に目を向けるようになる。

これは、今回実践した2年生の取り組みでも、3年生の取り組みでも見られた傾向である。3年生ともなると、学校の図書室だけではなく公立図書館にも足を

向け、書籍を探し出して来ている。このことは、メディアの活用という観点から言えば、彼らが体験の中で見つけた方法であり、多いに評価できる点であると考ええる。

(3) 各教科等の年間指導計画の調整

大規模校における情報教育推進のネックになるのが、1クラスあたりのコンピュータ室の利用頻度である。この問題は、教育の機会均等にも関わるものであるが、財政当局の英断を待つ間、そうした悪条件の中で、いかにして少しでも生徒の力を伸ばすかという問題と取り組む必要がある。

本校では、来年度からスタートする新教育課程への移行措置の中で、1年生から計画的にコンピュータの基本操作を訓練する計画を立てているところである。

これを実施することにより、上級学年

での各教科における活用も従来よりは、スムーズに実施できると考えている。

そのために、必要な条件の一つに、指導者の問題がある。全職員が一定の指導力を備える必要があるし、また、機会をとらえて、各教科の授業実践の中で活用する必要がある。このための職員研修は、今後必須である。

(4) ネットワークによるクライアントマシンの集中と分散

これからのコンピュータ活用のあり方は、「情報活用能力」の育成を目指したものでなくてはならないと考える。

そのためには、環境整備、教育課程の整備、教職員の指導力の向上、機器の管理など、多くの課題がある。

第1段階のコンピュータ活用は、「どの生徒も、使えるように」ならなく

てはならない。

そのために、「情報機器活用能力（コンピュータリテラシー）」の育成を中心とした授業を計画する必要がある。

次に、そうして身につけた力を生かして、「情報処理能力」「情報発信能力」を伸ばす学習も、教科（領域）の学習の場面で、進めなくてはならない。

そのための環境整備として、まずは、コンピュータ室に十分なクライアントマシンを配置する必要がある。

理想のコンピュータ活用は、「使いたい生徒が、使いたいとき、使いたいように使える」ものでなくてはならないと考える。

生徒は、様々なコンピュータ利用の体験を通して、よりよい活用方法も身につけていくと考えるが、それとは逆に、コンピュータ利用の限界にも気づいてい

くのではなだらうか。

学習を進める上で、生徒が主体的にコンピュータだけでなく、様々なメディアの中からその方法を選択し、活用していくことが理想である。つまり、個に応じた学習方法の選択である。

そのためにも、「使いたい生徒が、使いたいとき、使いたいように使える」環境を準備しておくことが必要である。

そのためには、校内ネットワークを張り巡らし、全ての教室からインターネットが出きるような環境を整備する必要がある。

本校では、今後の展開として、少しずつでも上記の環境を整えていきたいと考えている。

以上

文責 廣部 豪男